

## 原料炭の基礎物性部会報告会案内

主催 日本鉄鋼協会特定基礎研究会 原料炭の基礎物性部会

原料炭の基礎物性部会は昭和 52 年に発足しこの報告会を以てその研究活動を終了する事になりました。この間、石炭の乾留反応とコークス化性、熱物性値、コークスの破壊機構などの解明に大きな成果をあげることが出来ました。ここにその成果をこの報告会を通じて発表すると同時に、皆様と一緒にたつて討論し、将来の一層活発な前進のための糧としたいと思います。多数の御来聴を御待ちしております。

記

日 時 昭和 57 年 11 月 25 日 (木) 9:25~17:30

会 場 日比谷国際ビルディング 川崎製鉄(株) 30 階会議室  
〒100 東京都千代田区内幸町 2 丁目 2 番 3 号  
TEL 03-597-3111 大代表

参 加 参加費無料、申込不要 但し会場定員は 150 名

テキスト 「原料炭の基礎物性部会報告書」  
(2,000 円(予価) 当日会場にて販売致します)

### プ ロ グ ラ ム

- |             |                            |                               |
|-------------|----------------------------|-------------------------------|
| 9:25~9:30   | 開催挨拶                       | 部会長 木村 英雄                     |
| 9:30~10:20  | 石炭還元生成物の分子量と粘結性            | 北大工 大内 公耳<br>(座長 新日鉄 美浦 義明)   |
| 10:20~11:10 | コークス化特性よりみた原料炭のキャラクタリゼーション | 北大工 真田 雄三<br>(座長 大ガス 佐々木象二郎)  |
| 11:10~12:00 | 石炭の乾留反応の基礎研究               | 九大生産研 持田 勲<br>(座長 神鋼 福田 光弘)   |
| 13:00~13:50 | 石炭の乾留過程における熱物性値の測定         | 東北大工 大谷 茂盛<br>(座長 鋼管 松原 健次)   |
| 13:50~14:40 | コークスの反応性に関する基礎的研究          | 東大名誉教授 館 充<br>(座長 東ガス 野村 和夫)  |
| 14:55~15:45 | コークスの破壊機構に関する基礎研究          | 東工大工材研 木村 修七<br>(座長 川鉄 宮川 亜夫) |
| 15:45~16:35 | コークスの強度と破砕性に関する研究          | 東北大選研 八嶋 三郎<br>(座長 住金 角南 好彦)  |
| 16:35~17:25 | 総合討論                       | (座長 幹事長 宮津 隆)                 |
| 17:25~17:30 | 閉会挨拶                       | 部会長 木村 英雄                     |
- 不明な点は鉄鋼協会技術部までお問い合わせ下さい。(電話 (03) 279-6021)

### 一 書 評

#### 日本鉄鋼業—その軌跡—

川 崎 勉著  
B 5 版 定価 3,000 円  
昭和 57 年 8 月  
(株)鉄鋼新聞社発行

著者川崎 勉氏は法学部出身の経済学博士であるが日鉄社員として山岡武、伊能泰治、湯川正夫、島村哲夫の技術系先輩各氏の下で技術を学ぶ機会が多かつた。とくに戦後の混乱期には島村氏のもとで企画調査およびGHQの担当として業界の復興と生産能力の更新拡充のため大いに奮闘した。その間昭和 24 年の第 1 回米国技術調査団派遣、および昭和 36 年のヨーロッパ鉄鋼視察団派遣などに際しては、川崎氏は常に自ら進んで多くの助言と視察の焦点に関して多くの重要な提言を行うなど、同

氏の縁の下の力持的存在については関係者間によく知られている。

調査マンとしては前述の恵まれた環境下に、一貫してたゆみない努力を傾倒し八幡、富士両鉄鋼史の編纂などに参画するほか中井勵作氏や山岡武氏の自伝刊行の手伝いなどを通じて同氏の深い分析力は更に養われてきた。とくに 60 年代後半の設備競争の激しいなかで鉄道欧州事務所長として国際会議に出席しわが国の立場を説明して理解を求める努力を積み重ねたことは著者の国際的視野の拡大に一層役立ったものと思われる。

本著では「鉄鋼 10 年史」や「新日鉄史」編纂への参画で得た最近の経験をもとに、技術を含む全 5 章の各章にわたり日本鉄鋼業が今日まで歩いてきた経緯を 250 表にわたる統計を駆使して丹念に分析説明されており、今後鉄鋼業の進むべき道を政策的、技術的観点から示唆する点が極めて多いと思われる。あえて推薦の言葉に代える次第である。  
(伊木 常世)